

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 5 月 29 日現在

機関番号：17102

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2010～2013

課題番号：22720270

研究課題名(和文) 出土資料・石刻史料の分析によるモンゴル帝国時代華北多元社会の展開の解明

研究課題名(英文) A Study on the Transformation of Pluralistic Societies in North China under the Mongol Empire Based on the Analysis on Excavated Materials and Stone Inscriptions

研究代表者

船田 善之(FUNADA, Yoshiyuki)

九州大学・人文科学研究科(研究院)・講師

研究者番号：50404041

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円、(間接経費) 900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、モンゴル帝国の歴史像再構築に寄与すべく、モンゴルによる華北地域(北中国)統治の具体像と多元社会の様態を考察した。成果は主として以下の二点にまとめられる。第一に、モンゴル語・漢語の言語接触とモンゴル語直訳体と呼ばれる翻訳文体に関する議論を深化させ、モンゴル語の漢語に対する影響の歴史的背景を解明した。第二に、モンゴル統治層、地方官、道士の三者関係を考察し、モンゴル統治層の活動が華北地域社会の再編に大きな役割を果たしたことが明らかとなった。

研究成果の概要(英文)：This research considered the concrete image of Mongol rule and the state of pluralistic societies in North China in order that it would enable us to reconstruct the historical picture of the Mongol empire. The result of this study is mainly summarized as follows: firstly, it highlighted the historical background of the influence of Mongolian language over Chinese language by thoroughly examining the language contact between Mongolian and Chinese and the style of verbal translation from Mongolian to Chinese; secondly, the further analysis of the tripartite relationship among Mongol rulers, local officials and Taoist priests, led us to conclude that Mongol rulers' activities had played vital roles in restructuring the local societies across North China.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・東洋史

キーワード：モンゴル帝国 元 華北 碑刻 石刻 多元社会 道教 全真

1. 研究開始当初の背景

モンゴル帝国史の近年の研究状況を回顧すると、当該分野に従事する研究者の絶対数は決して多くはないものの、モンゴル統治層（ハーンとその一族、功臣）の活動、宗教政策、制度史、知識人の動向、ユーラシア規模での文化交流、史料研究において突出した成果が出されており、これら領域におけるわれわれの見解は格段に増加した。

ただし、モンゴル帝国における統治層の動向や統治システムが解明されつつあるのに反して、統治される側の実態については、未解明の部分が多い。換言すれば、近年の研究は帝国の上部構造に重点が置かれていたといっておく、その下部構造については、研究の深化が求められている。もちろん、こうした研究の欠落を埋めようとする動きは存在するが、史料状況が豊富な分野、つまり知識人社会の動向に関する研究がほとんどを占める。

また、早くから指摘されているように、中国史の文脈からみれば、その研究蓄積の多くが江南地域に偏っている。このような状況の下、何人かの研究者が、華北地域を対象としたモンゴル帝国史研究・金元史研究に取り組んでいる。モンゴル統治下の社会の実像解明へ向けて着実に前進しているとはいえ、その全体像や実態の把握への道のりは遠い。とくに、その多元社会の形成・様態については、異なる集団間の通婚関係、非モンゴル人のモンゴル化現象、非漢人の儒学修得・科挙を通じた漢化現象について、それぞれの研究が端緒についた段階である。本研究では、このような研究状況を踏まえて、研究代表者による統治システム研究の成果を基盤として、従来目配りが不十分であった、統治される側の実態の解明に取り組む。

2. 研究の目的

本研究は、文献史料に加え、出土資料・石刻史料を活用することにより、モンゴルが華北を版図に収め、さらに拡大を続け、それが収束して安定化する時代における、当該地域の社会の再編の過程について分析を加える。これにより、当該地域における漢人など諸集団が、モンゴルの統治体制に組み込まれ、その一端を担っていき、外来集団と混在・共存していく経緯・様態を解明する。また、モンゴル語と漢語の接触とモンゴル帝国の統治が独特の翻訳文体を創出し、それが当時の漢語社会に与えた影響を考察する。

これらの過程と現象は、まさに当時の華北地域社会の多元化と平行し、関連する形で展開していった。このことを強く念頭に置き、モンゴル語と漢語との接触と影響関係、モンゴル統治層の地域社会に対する影響、地域社会における宗教事業との関係に着目する。従

来、実証的な分析めきで、モンゴルによる統治のイメージが語られる傾向にあった。それは、時として被支配者を抑圧して横暴であったというマイナスのイメージであり、また時として寛容かつ巧妙であったというプラスのイメージである。本研究ではこのような先入観を一切排除し、一つ一つの事例を積み重ねることによって、モンゴル統治下の社会のあり方を再構築する。これらを通じて、華北地域社会がモンゴルの征服・統治を受動的に受け入れたのではなく、モンゴルと華北地域社会とが相互作用的に新しい時代展開を生み出したことを確認する。以上によって、華北地域社会の変容過程、多元化への道筋を描出することを本研究の目的として設定する。

3. 研究の方法

- (1) 基礎作業として、文献史料・発掘報告の収集・整理を行う。地方志・金石書や石刻関係の史料集、考古学の学術雑誌・報告書などから、石刻及びモンゴル帝国時代墓葬に関する情報・史資料を収集・整理する。

各種地方志・金石書・石刻目録・文物地図集から関連史料を抽出・整理し、現地調査、史料の解説・分析のための環境を構築する。

モンゴル帝国時代華北の墓葬発掘報告を、『中国考古学年鑑』『文物500期総目索引』等のレファレンスを活用しながら、『文物』『考古』等の関連学術誌や各種報告書から収集し、整理する。

- (2) 研究期間の各年度に一度ずつ現地調査を行う。石刻史料・博物館展示史資料等の調査により、出土資料・石刻史料の情報を収集するとともに、寺廟・史跡・景観の現地調査を通じて、石刻などの遺物を空間的に把握することにより、史資料分析と多元社会の検討の精度を高める。

石刻史料を利用するにあたっては、その原物が現存している場合、その現状を確認し、実見・調査することが不可欠となる。近年、石刻目録や文物関係書の充実により、おおまかな現存状況が把握できるようになった。もちろん、これまでの現地調査によって、こうした情報に漏れている石刻が多数あること、逆にあるはずの石刻が失われていることが判明している。したがって、現地調査に基づく史料情報の確定と共有が必要であることは学界の共通認識となっている。さらに、現状の記録自体が、年々風化し、また盗難の危険にさらされている石刻にとって焦眉の問題であることは言うまでもない。

現地の大学・博物館の協力を仰ぎ、

モンゴル帝国時代華北墓葬出土資料の調査を行う。

- (3) 必要に応じて研究機関等に所蔵される拓本についても、適宜調査を行う。
- (4) 上記の作業に基づき、関連石刻史料のデータベースを構築する。
- (5) 収集史資料の分析・解読を行う。各種典籍との比較検討が不可欠となるが、これまでの研究蓄積を十分に生かしつつ、電子テキストを併用する。
- (6) 史資料の分析・解読に基づき、研究課題の考察・検討を進め、国際会議発表・論文執筆によって成果を公表する。

4. 研究成果

- (1) 海外研究機関の訪問と海外研究者との情報交換：陝西師範大学・山西大学・インディアナ大学を訪問し、これらの大学の研究者（教員・大学院生）とモンゴル時代の寺廟・出土資料・石刻史料・文献史料・言語ならびに研究の視角と潮流について、情報・意見を交換し、議論を深めることができた。また、国際会議・国際ワークショップ・学会・研究会に参加した際にも、内外の研究者との情報・意見交換に努めた。このような機会に得られた研究情報や助言は、本研究の進展を促進するものであった。

- (2) 本研究に基づいて実施した現地調査・資料調査は下記の通りである。調査にあたっては、陝西師範大学・華雨蔵珍之館・山西大学・インディアナ大学の研究者・職員ならびに現地の関連機関の協力を得ることができた。ここに特記して謝意を表したい。

陝西省西安市・銅川市一帯における調査：陝西省西安市・銅川市・富平県・高陵県・三原県・ケイ陽県・咸陽市の寺廟、ならびに西安博物院・耀州区博物館・耀州窯博物館・三原県博物館・ケイ陽博物館・咸陽博物館などにおいて、出土資料・石刻・建築・遺跡の調査を行った。薬王山のモンゴル時代石刻や各博物館に展示されるモンゴル時代陶俑など本研究に直結する重要な史資料を実見調査し、有用な情報を収集することができた。

華雨蔵珍之館（足利市）における拓本調査：モンゴル時代石刻の拓本を閲覧・調査し、本研究に重要な知見を提供する拓本を実見することができた。

山西省晋城市一帯における調査：山西省陽城県・高平市・晋城市・沢州県及び河南省新鄭市の寺廟、ならびに陽城県文物博物館・新鄭博物館などにおいて、出土資料・石刻・建築・遺跡の調査を行った。鄭国公祠・聖

姑廟のモンゴル時代石刻など本研究に直結する重要な史資料を実見調査し、有用な情報を収集することができた。

山西省太原市・陽泉市一帯における調査：山西省太原市・古交市・孟県・陽曲県の寺廟などにおいて、石刻・建築・遺跡の調査を行った。東山洞・蔵山祠のモンゴル時代石刻など本研究に直結する重要な史資料を実見調査し、有用な情報を収集することができた。

インディアナ大学図書館および内陸アジア研究サイナー研究所で資料調査を実施し、研究成果公表に必要な資料を閲覧・収集した。

遼寧省遼陽市・丹東市・鞍山市・大連市一帯における調査：遼寧省遼陽県・本溪満族自治県・鳳城市・丹東市・寛甸満族自治県・東港市・岫岩満族自治県・鞍山市・海城市・蓋州市・旅順口区の寺廟、ならびに岫岩博物館・旅順博物館などにおいて、出土資料・石刻・建築・遺跡の調査を行った。旅順博物館所蔵のモンゴル時代石刻及び遺物など本研究に直結する重要な史資料を実見調査し、有用な情報を収集することができた。

- (3) 具体的な成果とその公表

「色目人」に関する研究：モンゴル時代華北多元社会の一つの重要な要素である「色目人」と呼ばれる人間集団のカテゴリーと呼称について、それが漢人からの便宜的呼称であり、身分序列のカテゴリーではないとする自身のこれまでの研究成果にいくつかの知見を加え、国際会議で英語による口頭発表を行った。英語論文の国際誌への掲載が内定している。

モンゴル語直訳体の漢語への影響：モンゴル語と漢語の接触とモンゴル帝国の統治が創出した独特の翻訳文体「モンゴル語直訳体」は、当時の多元社会が言語において具現化したものといつてよい。さらに、当時の会話教本『老乞大』や『朴通事』にはモンゴル語直訳体と共通の言語要素がみられる。この言語現象の位置づけについては、いまだに見解の一致をみていない。『老乞大』の言語特徴のうち、代名詞の用法が必ずしもモンゴル語直訳体と一致しないことを実証し、この両者が共通の言語特徴を有しつつも、その由来が同一ではないことを論証した。そして、公文書の伝達・公布を分析することにより、モンゴル語直訳体が当時の漢語に影響を与えた歴史

的背景を解明した。これによって、限定的ではあるが、当時の多言語状況と言語接触が漢語の口頭語の変容をもたらしたことが明らかとなった。これらの成果は、国際学会・国内学会で口頭発表し、国内外の学術雑誌に掲載された。また、インディアナ大学において行った英語による学術講演もこの成果を含むものである。

モンゴル諸王・道士・地方官の活動と相互関係：モンゴルによる華北統治の特徴をなすモンゴル諸王の命令文に焦点を当て、モンゴル統治層の命令文の発令とその刻石が地域社会においてもっていた意義について考察した。宣慰司官の巡察・道観参拝を契機とする唐四仙姑(金代の道姑)の遷葬をめぐる過程を解明した。この事例は、石碑の「公開性」という性格に起因するものであり、その「実用性」が機能した結果でもある。そして、モンゴル統治層の命令文が地域社会に大きな影響を与えていたことが確かめられた。地域社会における宗教事業は、宗教教団と地方官によって担われていたが、モンゴル統治層の命令文もまた不可欠の要素であったといえる。この成果は、国内の学会で口頭発表を行い、国内の学術雑誌への掲載が内定している。

ジュシェン - モンゴル(金元)移行期における地域社会の再編とモンゴル統治層の影響：モンゴル時代初期、地方官府が発給した文書を刻した石刻史料の分析を加えた。モンゴル統治層は、華北地域を所領として分与されていた。この石刻史料は、モンゴル統治層が所領の華北地域から有用な人員を徴発するという具体的な事例と経緯を記述している点において重要である。そして、このモンゴル統治層の命令と地方官府の文書発給を契機として、ジュシェン - モンゴル移行期における、モンゴル統治層、地方官、道士、村民による地域社会の再構築が進められていたことが明らかになった。この成果は、国際会議で英語による口頭発表を行った。

関連する史料研究・調査報告：本研究に関連する史料学研究として、石刻研究と現地調査の概観と展望、文書史料についての総説を公刊した。また、石刻史料の移録・目録や調査報告なども、研究情報の共有と還元を目指してまとめている。

以上から、モンゴルによる華北地域統治の具体像と多元社会の様態の

考察を通じて、モンゴル帝国時代の華北における言語の変容、モンゴル統治層の地域社会に対する影響とその再編の過程が明らかとなった。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

(雑誌論文)(計12件)

Funada, Yoshiyuki, "The Image of the Semu People: Mongols, Chinese, Southerners, and Various Other Peoples under the Mongol Empire." *Historical and Philological Studies of China's Western Regions*. Vol.7, 2014, in print, 査読有

船田善之「モンゴル時代華北地域社会における命令文とその刻石の意義 ―ダリタイ家の活動とその投下領における全真教の事業―」『東洋史研究』第73巻第1号, 2014年, 印刷中, 査読有

船田善之, 于磊訳「元代命令文書の開読使臣考論 ―以開読使臣の人員構成及巡行路線を中心―」『元史及民族与边疆研究集刊』第25輯, 2013年, pp.195-210, 査読有

船田善之「古本《老乞大》中の“兀的”“兀那”“阿的”兼談古本《老乞大》與蒙文直譯體之語言特徵及其位置」『歴史語言學研究』第4輯, 2011年, pp.54-70, 査読有

船田善之「モンゴル帝国(大元)史研究における漢語文書史料について」『歴史と地理 世界史の研究』649号 2011年, pp.54-58, 査読無

船田善之「アムール川兩岸探訪記」『シルクロード』vol.21 2011年, pp.15-19, 査読無

船田善之「ハルハン大王と寧海王イスマールイールの令旨碑」『13, 14世紀東アジア史料通信』第15号 2011年, pp.10-15, 査読無

<http://repo.nara-u.ac.jp/modules/xoonips/detail.php?id=AA12055118-20110300-1003>

船田善之「モンゴル語直訳体の漢語への影響 ―モンゴル帝国の言語政策と漢語世界―」『歴史学研究』第875号, 2011年, pp.1-12, 64, 査読有

船田善之「丸山孝一著『周縁文化の視座 ―民族関係のダイナミクス―』」『シルクロード』vol.20, 2010年, pp.18-19, 査読無

船田善之「陳高華・張帆・劉曉著『元代文化史』」『集刊東洋学』第103号, 2010年, pp.95-102, 査読有

船田善之「『中国蒙元史学術研究会暨方齡貴教授九十華誕慶祝会』参加報告」『13,

14 世紀東アジア史料通信』第 13 号, 2010 年, pp.9-11, 査読無
http://repo.nara-u.ac.jp/modules/xo_onips/detail.php?id=AA12055118-20100500-1003
井黒忍・船田善之・飯山知保・小林隆道 共著「河東訪碑行報告」『九州大学東洋史論集』第 38 号, 2010 年, pp.1-37, 査読有

〔学会発表〕(計 13 件)

船田善之「チャガタイのことばと太原府の笥付 モンゴル統治層と華北地域社会を結ぶもの」第 47 回東洋史学研究会, 2014 年 2 月 23 日, 福岡
船田善之「中国山西省太原に残されたチャガタイの命令 モンゴル帝国の拡大と統治を可能とした秘密に迫る」九州・シルクロード協会 2013 年度第 5 回交流会, 2013 年 12 月 15 日, 福岡
船田善之「漢語文書に記録されたチャガタイの令旨とタムガ モンゴル時代初期の石刻史料より」国際ワークショップ「ユーラシア東部地域における公文書の史的展開 胡漢文書の相互関係を視野に入れて」, 2013 年 9 月 21 日, 豊中
FUNADA, Yoshiyuki, “The World of *Lao Kidai*: Travels, Trades and Spoken Chinese Described in the Chinese Textbook during Mongol Period.” Special Lecture Sponsored by the Department of Central Eurasian Studies and East Asian Studies Center, Indiana University, 11 April 2013, Bloomington, IN, United States.
FUNADA, Yoshiyuki, “Mongol Rulers and Northern Chinese Society under the Early Mongol Empire: A Study on Chaghatai’s Domain in Taiyuan.” 2013 ACES Annual Conference, 7 April 2013, Bloomington, IN, United States.
FUNADA, Yoshiyuki, “Chaghatai and the Dongxian-dong: Mongol Rulers and Local Society in Taiyuan.” The 2013 AAS Annual Conference, 21 March 2013, San Diego, CA, United States.
船田善之「モンゴルの襄樊包圍戦とその軍事拠点」平成 24 年度九州史学会大会シンポジウム「戦跡からみたモンゴル襲来 東アジアから鷹島へ」, 2012 年 12 月 8 日, 福岡
船田善之「チャガン・ノヤンの言語二通について モンゴル時代早期のモンゴル語直訳体碑文」第 44 回中央アジア学フォーラム, 2012 年 3 月 31 日, 豊中
船田善之「石刻フィールドワークの手法と実践 石刻調査研究の近 10 年の回顧と展望」国際ワークショップ「近世華北

における社会的紐帯としての宗族と宗教 2001~2011 年における石刻史料調査の成果と新展開」, 2011 年 12 月 21 日, 東京
船田善之「ダーリタイ後裔諸王とモンゴル時代寧海州の社会 令旨とその刻石の意義をめぐって」2011 年度東洋史研究会大会, 2011 年 11 月 3 日, 京都
FUNADA, Yoshiyuki, “The Image of the Semu People: Mongols, Chinese, and Various Other Peoples under the Mongol Empire.” Roundtable on the nature of the Mongol empire and its legacy with respect to political and spiritual relations among Asian leaders and polities. 6 November 2010, Vienna, Austria.
船田善之「モンゴル時代華北石刻の調査研究から構築する「石刻学」」第 33 回東洋史学研究会, 2011 年 7 月 31 日, 福岡
船田善之「古本《老乞大》与蒙文直訳体」“《老乞大》、《朴通事》的語言”国際学術研討会, 2010 年 6 月 12 日, 中国浙江省桐廬県

〔図書〕(計 4 件)

学習院大学東洋文化研究所編, 船田善之・井黒忍・飯山知保・小沼孝博・David Brophy 共著『遊牧世界と農耕世界の接点 アジア史研究の新たな史料と視点』学習院大学東洋文化研究所, 2012 年, pp.1-30
光藤宏行編, 船田善之分担執筆『コミュニケーションと共同体』九州大学出版会, 2012 年, pp.145-158
吉田順一監修, 早稲田大学モンゴル研究所編, 船田善之分担執筆『モンゴル史研究 現状と展望』明石書店, 2011 年, pp.65-90
聶鴻音・孫伯君編, 船田善之分担執筆『中国多文字時代の歴史文献研究』社会科学文献出版社, 2010 年, pp.309-31

〔その他〕

ホームページ等
<http://www2.lit.kyushu-u.ac.jp/~funada/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

船田 善之 (FUNADA, Yoshiyuki)
九州大学・大学院人文科学研究院・講師
研究者番号: 50404041